



「二人称」科学の新たな可能性とコンフュージョン懸念

長谷川 芳 典

(岡山大学社会文化科学研究科)

“Second-Person” Science: New Perspectives and Some Possible Confusions

HASEGAWA Yoshinori

(Graduate School of Humanities and Social Sciences, Okayama University)

武藤論文は、Gendlin & Johnson (2004) が提唱した「一人称」の科学の言説に対して「二人称」の科学が確立可能であり、対人援助学に適合すると主張している。またその「二人称」は単なるレトリックではなく、他者との関係性を含み込んだ「動的な過程を扱いながらも他者を再帰的に記述していく」というスタンスを示している。こうした斬新なアイデアは、心理学研究の新たな可能性を開くものであり、学術的価値の高い論文であると考えられる。本稿ではその価値を認めた上で、さらに議論を発展させるという建設的な目的で、いくつかのレベルからコメントをさせていただくことにしたい。なお紙幅の制限上、一部の議論については内容に立ち入らず関連研究の列挙にとどめる部分があることをあらかじめお断りしておく。

1. 既存の「二人称」概念への対応

武藤論文でいう「二人称」は既存の概念にはない新しい着想である。しかし、それであればこそ、一般論として、新たな視点や理論体系を提唱する場合には、誤解や混同を避けるためにも、既存概念と同一の呼称はできるだけ使わないほうが無難であるように思える。対人援助学の方法論を論じるべきところに、関連領域ですでに使われている「二人称」という呼称を用いると、対人援助学から離れたところで、ここで使われている「二人称」とはこの点が異なるといった説明に終始せざるをえなくなり、特徴づけの焦点がぼやけてしまう恐れがあるように思

う。

以下、すでに使われている「二人称」の例を挙げながらこの問題点について考えてみることにしたい。

1-1. 文法あるいは日常的な用法における人称体

まずは一般的な「二人称」用法と区別をする必要がある。周知のように、人称体表現は、話者（文書であれば執筆者）がどのような視点から対象に接しているのかによって区別される。通常、二人称表現は「あなた」を主語とし、相手に対して何かを要求したり呼びかけたりする場合に用いられる。そのような経緯から二人称で書かれた小説はきわめて少ないと言われている。武藤論文や本稿はいずれも「二人称」について語っているが、二人称体ではなく、おおむね三人称体で書かれている点にも留意する必要がある。

人称表現でもう1つ重要と思われるのは一人称複数、すなわち「私たち」という表現である。「二人称」自体は「私」から「あなた」への一方向であるのに対して、「私たち」は、当事者どうしとの関係性があり、かつ、何かを共有したり特定目標に向かっていくというイメージがある。武藤論文で論じられている特徴のいくつかの点は、じつは「一人称複数」と見なしたほうが妥当であるかもしれない。

1-2. 心理学史の中に見る人称

まず、「一人称的心理学、二人称的心理学、非人称的心理学—人間科学の限界への旅 (I)」(渡辺、

1989) を引用させていただく。紙幅の関係で詳しく論じることはできないが、渡辺氏は哲学や心理学の歴史を渉猟し「二人称心理学」について以下のように述べている【長谷川による要約引用】。

- ・一般人の、実験心理学への違和感は、自生的心理学（もしくは民間心理学が、もっぱら人間の「二人称モデル」に対応している処からくる。精神分析や、その影響に連なる心理療法理論、人格の理論も、ほんらい、二人称的心理学だったと考えられる。【98 頁】
- ・三種の人称的心理学のうち、二人称的心理学は、民間心理学として、人間社会の形成以来あったことだろう。けれど、学としての体系化についていえば、一人称的心理学がもっとも早く、二人称的心理学がそれに継ぎ、非人称的心理学がもっとも遅い。【94 頁】
- ・人間の二人称モデルといい、人格主体としての人間といい、結局は相互主観性の場における他者のことなのである。【83 頁】

同氏は、最近の論考の中でも、「主観的一人称的視点 vs 客観的三人称的視点」という対立軸、および「二人称的態度（理解）vs 非人称的態度（説明）」という対立軸からなる心理学メタパラダイムの2次元図を提唱しており（例えば、渡辺 2013）、「二人称」科学の位置づけ上、大いに参考にすべきであると考ええる。但し、スキナーの徹底的行動主義、あるいはその後さらに発展した機能的文脈主義を、ワトソンによる旧来の行動主義と区別して論じているような渡辺氏の著作は、現時点では探し出すことができなかった。

1-3. パーソナリティ心理学における人称

人称的視点の重要性は、渡辺・佐藤（1993）が提唱した「モード性格論」の中でも論じられている。その内容はサトウ・渡邊（2005）、さらに渡邊（2010）でわかりやすく解説されている。要約引用すると以下ようになる。

- 一人称的視点：「自分が自分の性格を見る」視点。
- 二人称的視点：自分と相互作用のある他者、つまり「あなた」の性格を見ている。
- 三人称的視点：観察者と相互作用のない第三者、

つまり他人の性格を見る視点。科学的な性格心理学が目指す客観的な性格把握の視点。

3つの視点の関係：性格を観察する視点によってデータは主観的であったり客観的であり得たりするし、一貫性のあり方やその意味も大きく異なる。性格についての議論において異なった視点からの観察やデータを混同することは望ましくない。

3つの視点は「性格」関連のデータを得る際の重要な区別であり、これにより、「性格」の通状況の一貫性のカラクリが理解できる。3つの視点がパーソナリティ心理学の領域に限定されていることによって、より説得力のある説明が達成できている点は、大いに参考にすべきである。武藤論文においても、「二人称」科学という枠をあまり抜けすぎず、「対人援助学の方法論」という論文タイトル通りの領域に限定した上で、3つの視点がどのような違いをもたらすのかを解説していただければいっそう理解しやすくなるように思われる。

1-4. 人工知能研究における人称

武藤論文には『一人称研究のすすめ：知能研究の新しい潮流』という書籍（諏訪・堀, 2015）への言及がある。この書籍は、その前書きにも記されている通り、『人工知能学会誌』2013年9月号の特集「一人称研究の勧め」に掲載された論文をベースにして、一般の読者向けに各著者が加筆、修正を施したものとされている。

2013年の特集号企画趣旨（諏訪・堀, 2013）のところに、

本特集は、知能研究が抱える問題に真正面から挑むための新しいパラダイムについて問題提起するものである。人工知能学会だけではなく関連学会も巻き込んで、研究方法についての保守的な閉塞を打破するような議論が、知能研究の舞台に「噴出」することを期待する。

と述べられているように、壮大で野心的な問題提起を企図したものであり、しかも人工知能学会誌の特集号として企画されたという点でその影響力は計り知れないところがある。

武藤論文では書籍版の第1章（諏訪, 2015）のみ

が取り上げられているが、この書籍（もしくは2013年特集号）の中には、人工知能による認知症高齢者支援（大武, 2015）や創造活動支援（堀, 2015）など、広い意味での対人援助にかかわる話題も取り上げられている。さらに、堀（2015）に挙げられている「人工知能研究者に問うあなたの研究の位置づけに関する八つの質問」などは、そのまま心理学研究者に投げかけて議論を発展させることもできるだろう。もっとも、対人援助学の立場から彼らの提唱に応えるには、少なくとも同程度のボリュームの書籍1冊分が必要であろう。

2. 行動分析学は「二人称」科学か？

武藤（2013a）は、「二人称」の科学の具体例として「行動分析学」、特に「臨床行動分析」が挙げられるとした。但し、今回の武藤論文では、“いささか「我田引水」な言説であり、その学術的な妥当性が十分であるとは言い難い。”という表現にトーンダウンしている。

たしかに、行動分析学の対象の1つである二者間相互強化場面などはきわめて二人称的であると言える。要支援者と支援者ばかりでなく、親子、夫婦、きょうだい、先生と生徒、お店とお客といった二者間の行動はすべて双方向に強化されており、それを動的に捉える上では「二人称」的視点は大いに役立つと思われる。

もっとも、武藤（2013a）が提唱する、“臨床における「人称性と科学」に関する3つの次元および「二人称」の科学的な援助行為空間”（図1）によって、行動分析学がうまく特徴つけられるかどうかについてはまだまだ疑問が残る。

2-1. 私的出来事の扱い

私的出来事をどう扱うかということは、スキナーが創設した行動分析学（＝徹底的行動主義）と、ワトソンらの方法論的行動主義の立場を区別する最も明確な基準の1つである。スキナーはPsychological Review誌の1945年特集号「SYMPOSIUM ON OPERATIONISM」の中で、この点を明確に論じている（Skinner, 1945；長谷川, 2016参照）。本稿では

詳しく論じる紙幅が無いが、「二人称」科学に私的出来事をどう組み込むかは重要なカギになるように思われる。

2-2. 単一事例研究と人称表現

武藤論文（武藤, 2013aを含む）には一事例の実験デザインについての言及がある。援助方法の効果検証においてこの方法が適切であることは指摘されている通りであると思われる。単一事例法の意義と限界については長谷川（2007）が論じた通りであるが、一例として、ある薬が治療薬として有効であるのかどうかを検討するのであれば群間比較、いっぽう、当該の薬が特定の個人の治療に有効であるのかどうかを検証する場合は単一事例法ということになる。もっとも、何らかの施策やモデルを現場に適用しようとする場合は、不特定の環境的変動要因を排除することは困難であり、また、コスト、現場のニーズ、倫理的問題などさまざまな制約から単一事例法をそっくり当てはめることが困難であることも少なくない。そのような場合は、Plan（計画）→ Do（実行）→ Check（評価）→ Act（改善）の4段階を繰り返すPDCAサイクル、あるいはその発展型、また、アクションリサーチ（JST社会技術研究開発センター・秋山, 2015参照）などの実践的手法を導入する必要もある。

なお、単一の実験参加者（あるいは被験動物）による実験研究は、普遍性を追究する科学においても有用であり、必ずしも「一人称」や「二人称」に限定された方法というわけではない。じっさい、パヴロフの条件反射の研究や、エビングハウスの記憶実験などは、一事例とはいえ、普遍性のある法則を発見している。もちろん単一事例研究の中には、伊藤・松原（2015）のように、傑出した能力のある人1名のみを対象とした研究もある。

2-3. 機能的文脈主義と人称表現

次に留意すべき点は、行動分析学における機能主義独特の「人称」表現である。以下はいずれもトールネケ（2013）から抜粋したものであるが、下線部（長谷川による）の主語と述語の関係に注目していただきたい。

- ・条件刺激は、無条件刺激およびそれに付随する反応と直接結びついて起こることで、その機能を獲得するのである。【30 頁】
- ・ある刺激に対して行動が生じる、あるいはある刺激の影響下で行動が生じる場合、その刺激や出来事はその生体の行動に対して機能を有している。私が車を目にするとき、この車は、私の視覚に対して機能を有している【96 頁】
- ・私が暗い部屋の中にいるときに、明かりがつけられる。このことは、私にとってさまざまな刺激機能を有する可能性があり、...【以下略、96 頁】

上掲の抜粋ではいずれも「刺激」が「機能を獲得する、有する」といった表現が用いられている。これは決して、英語特有の無生物主語表現ではない。そして重要な点は、その刺激自体の物理的エネルギーや化学成分が変化するわけではないということ、「機能を持つ」というのはあくまで、特定の文脈のもとで、当事者と刺激との間で成り立つ概念であって、いずれが欠けても当該機能は発揮されないということである。こうした機能的文脈主義独特の人称体表現にさらに付け加える形で、「二人称」科学特有の記述スタイルが維持できるのか、心許ないところがある。

2 - 4. Pepper の世界仮説と人称表現

1 - 3. で言及した人工知能関連の書籍の中には「客観至上主義を疑ってみる」(中島, 2015) という興味深い章が含まれている。もっとも、こうした主張は、心理学の世界では以前から議論されており、それほど目新しさを感じられるというわけでもない。このことに関連してぜひとも言及しておきたいのが、Pepper (1942) の「世界仮説」である。武藤 (2001, 2011) によれば、「世界仮説」では、さまざまな思想・主義は、

1. 世界は要素で構成されているか
 2. 世界は1つのストーリーとして語る事が可能か
- によって、4つに分類される。

行動分析学の学界では、1980年代以降、Hayes, Hayes & Reese (1988) らによってこの世界仮説が取り上げられ、その後の関係フレーム理論 (Hayes,

Barnes-Holmes & Roche, 2001) や ACT の哲学的基盤となった。ちなみに、スキナーの徹底的行動主義は、特に初期の著作には機械主義と文脈主義が混在していると指摘されているが、全体としては行動分析学は、文脈主義の特色を有すると結論されている (武藤, 2001 参照)。

紙幅の関係で内容に立ち入った議論は省略するが、「客観至上主義を疑ってみる」(中島, 2015) や「一人称研究」は世界仮説の枠組みでも議論が可能である。というか、徹底的行動主義、関係フレーム理論、ACT などが、世界仮説のいうルート・メタファーで分類、特徴づけられるのであれば、それに加えてあえて「二人称」を用いる必要は無いようにも思われる。

2 - 5. 心理療法における2つの舞台

トールネケ (2013) は「心理療法における二つの舞台」について以下のように述べている (ランメロ・トールネケ, 2009 を併せて参照)。

心理療法というものはすべて、2つの別な舞台、つまり2つの原理的に異なる条件に対して取り組むことになる。第一の舞台は、セラピストとクライアントによって共有される場—彼らがセッションの場で過ごす時間である。第二の舞台は、第一の舞台以外のクライアントの生活であり、援助を求めた原因となった問題または困難にクライアントが遭遇する場である。第一の舞台は、セラピストが、その場に居合わせることで直接的に影響を与えることができる唯一の場である。同時に、クライアントがセラピーの場以外で過ごす生活である第二の舞台は、当然、長期的にはクライアントにとってより重要となる。すなわち、第二の舞台こそが、変化が必要とされる場である。

武藤論文および、武藤 (2013a) や武藤 (2013b) の中では、「二人称」科学の適用範囲が、この2つの舞台全体に及ぶものであるのか、それとも「第一の舞台」のみにかかわるものなのかが、よくわからないことがあった。入居型施設 (障がい者施設や高齢者介護施設など) では生活空間の大部分が第一の舞台で占められることになるいっぽう、デイサービスや来談型の心理療法では第二の舞台こそが重要で

あると思われるが、第二の舞台では「二人称」科学がどのように適用されるのだろうか。

でもプラスになる面があるだろう。

3. まとめ

以上のコメントで最も強調しておきたいのは以下の2点である。

- (1) 「二人称」という呼称はすでに多方面で使用されており、新たな視点や理論体系を提唱する場合に使用すると誤解や混同を招く恐れがある。またそれを避けるために、既存概念との違いを細かく比較対照する必要があるが、そのことにエネルギーを注ぐことが本来目的とする対人援助学の方法論の特徴づけに最適であるかどうかは検討が必要であろう。
- (2) 行動分析学の発展型としての関係フレーム理論やACTは、Pepper (1942) の世界仮説、さらには機能的文脈主義によって十分に特徴づけられるのではないか。それに加えて「二人称」の科学を展開すると、かえってACTの特徴が見えにくくなってしまっているのではないか？

いずれにせよ、「二人称」という呼称を用いることは、それを使わなかった場合に比べてどういうメリットがあるのか、それによってどういう新しい主張ができるのか、それによって何を体系化することが可能になるのか、をさらに詳しく展開していくことが大切であろう。

なお、新しい概念を特徴づける目的で「二人称科学」に代わる呼称を用いるとした場合は、外来語として定着していないカタカナ語を使うか、「間人（かんじん）心理学」、「相互心理学」といった言葉が浮かぶ。但し「間人」についてはすでに「間人主義」という言葉があり、混同される恐れもある。

最後に、「二人称」という呼称を用いることにメリットもありうる点も指摘しておきたい。それは、「二人称」という呼称がなじみ深くさまざまな用法が確立している言葉であるため、他領域からの関心を集めやすいというメリットである。じっさい「機能的文脈主義」という呼称よりは「二人称」を前面に出し、人工知能研究者や心理学史研究者たちとの議論を活発にすることは、対人援助学の発展にとっ

文献

- Gendlin, E. T., & Johnson, D. H. (2004). Proposal for an international group for a first person science. The Focusing Institute website: http://www.focusing.org/gendlin_johnson_iscience.html.
- 長谷川芳典 (2007). 心理学研究における実験的方法の意義と限界 (4) 単一事例実験法をいかに活用するか. 岡山大学文学部紀要, 48, 31-47.
- 長谷川芳典 (2016). 行動分析学における「自己」関連概念 (1) スキナーの『科学と人間行動』および初期の著作. 岡山大学文学部紀要, 65, 1-28.
- Hayes, S. C., Barnes-Holmes, D., & Roche, B. (Eds.). (2001). *Relational Frame Theory: A Post-Skinnerian account of human language and cognition*. New York: Plenum Press
- Hayes, S.C., Hayes, L.J., & Reese, H.W. (1988). Finding the philosophical core: A review of Stephen C. Pepper's World Hypotheses: A Study in Evidence. *Journal of the Experimental Analysis of Behavior*, 50, 97-111.
- 堀浩一 (2015). 知の研究のスペクトラムを拡げる—人工知能研究の方法. 諏訪正樹・堀浩一 (編). 一人称研究のすすめ: 知能研究の新しい潮流. 近代科学社.
- 伊藤毅志・松原仁 (2015). 突き抜ける人の思考—羽生善治氏の将棋観. 諏訪正樹・堀浩一 (編). 一人称研究のすすめ: 知能研究の新しい潮流. 近代科学社.
- JST 社会技術研究開発センター・秋山弘子 (編). 高齢社会のアクションリサーチ 新たなコミュニティ創りをめざして. 東京大学出版会.
- 武藤崇 (2001). 行動分析学と「質的分析」(現状の課題). 立命館人間科学研究, 2, 33-42.
- 武藤崇 (2013a). 臨床行動分析とACT: 「二人称」の科学と実際. 臨床心理学, 13, 202-205.
- 武藤崇 (2013b). 同盟の作り方. 臨床心理学, 13, 779-782.
- 中島秀之 (2015). 客観至上主義を疑ってみる. 諏訪正樹・堀浩一 (編). 一人称研究のすすめ: 知能研究の新しい潮流. 近代科学社
- 大武美保子 (2015). 健康を育む知—高齢者の会話. 人工知能学会 (監修) 諏訪正樹・堀浩一 (編). 一人称研究のすすめ: 知能研究の新しい潮流. 近代科学社.
- Pepper, S. C. (1942). *World Hypotheses: A study in evidence*. Berkeley: University of California Press.
- ランメロ, J.・トールネケ, N. (著) 松見淳子 (監修) 武藤崇・米山直樹 (監訳) (2009). 臨床行動分析のABC. 日本評論社.
- サトウタツヤ・渡邊芳之 (2005). 「モード性格」論 心理

- 学のかしこい使い方. 紀伊國屋書店. 【サトウタツヤ・渡邊芳之 (2011). あなたはなぜ変わらないのか—性格は「モード」で変わる—心理学のかしこい使い方. ちくま文庫.】
- Skinner, B. F. (1945). The operational analysis of psychological terms. *Psychological Review*, 52, 270–277, 291–294.
- 諏訪正樹 (2015). 一人称研究だからこそ見出せる知の本質. 人工知能学会 (監修) 諏訪正樹・堀浩一 (編). 一人称研究のすすめ: 知能研究の新しい潮流. 近代科学社.
- 諏訪正樹・堀浩一 (編) (2015). 一人称研究のすすめ: 知能研究の新しい潮流. 近代科学社.
- トールネケ, N. (著) 武藤崇・熊野宏昭 (監訳). (2013). 関係フレーム理論 (RFT) をまなぶ: 言語行動理論・ACT 入門. 星和書店.
- 渡辺恒夫 (1989). 一人称の心理学, 二人称の心理学, 非人称の心理学—人間科学の限界への旅 (1). 東邦大学教養紀要, 21, 78–100.
- 渡辺恒夫 (2013). 特集「心理学・人間科学メタ理論の新展開」への序論および後記 (<特集>心理学・人間科学メタ理論の新展開). 科学基礎論研究, 40, 85–86.
- 渡邊芳之 (2010). 性格とはなんだったのか—心理学と日常概念—. 新曜社.
- 渡邊芳之・佐藤達哉 (1993). パーソナリティの一貫性をめぐる「視点」と「時間」の問題. 心理学評論, 36, 226–243
- (2016. 11. 18 受理)
(ホームページ掲載 2017年5月)